

実践報告

地域子育て支援活動「子どもミュージアム」における取り組み —令和元年度の実践報告—

山口侑香里・田中麻里・三ヶ島有香

(西九州大学子ども学部子ども学科)

(令和3年1月12日受理)

Efforts in Community Childcare Support Activity, “Children’s Museum” : 2019 Practice Report

Yukari YAMAGUCHI, Mari TANAKA, Yuka MIKASHIMA

(*Department of Children’s Studies, Faculty of Children’s, Nishikyushu University*)

(Accepted January 12, 2021)

Abstract

The “Children’s Museum,” a regional child rearing support program at our university, has been implemented since Academic Year 2009, when the Faculty of Children’s Studies was established, and it will be entering its for eleven years in AY 2019. The unifying theme is the “creation of children’s culture”; the “Museum” provides an environment and play activities that include the elements required for children’s growth, such as physical play, singing, storytelling, science, and activities that bring us into contact with the nature around us. All these can be experienced in a context of interpersonal connections. Thirteen meetings were held in AY 2019 with a total of 97 households (241 people) participating. Fifty percent of participants indicated “very satisfied satisfied” for the activities they participated in, with 44% indicating “satisfied”. This paper reports the outcomes and future direction of program activities, based on the overview and program performance records of the AY 2019 “Children’s Museum,” and the data from the follow-up questionnaire targeting parents, elementary school students and University students.

Key word : Community 地域
Parent and child 親子
Childcare support activities 子育て支援活動

1. はじめに

本学子ども学科では、西九州大学子ども学部子ども学科が新設された平成21年度（2009）より、地域の子どもとその保護者を対象に、子育て支援を目的とした地域子育て支援活動「子どもミュージアム」を開催してきた。本活動は、令和元年度（2019）で11年目を迎えた。活動当初から今日まで、①「子育て・子育てのための地域支援活動」、②「地域に開かれた大学づくり」、③「保育・教育者を志す学生の実践活動」の3つを本活動の大きな目的として実施している¹⁾。また、本活動のテーマとして「子ども文化の創造」を掲げており、身体遊び、歌遊び、おはなし、科学、身近な自然にふれる活動など、子どもの成長に必要なものを、人と人との繋がりの中で体験できる遊びや環境の提供を行っている²⁾。

本活動は、本学科の3年生が授業の一環で実施しており、学生が中心となり活動の企画・立案・運営を行っている。近い将来、保育者や教育者を目指す学生にとって、実践的な活動を通して実践力や展開力の育成、子どもへの支援に限らず子育て中の親（保護者）も安心して楽しく過ごせるよう“親子”を支援する“子育て支援”の場の必要性を感じることが出来る活動の実践を目指している。

2. 活動の概要

1) 活動運営

本活動は、令和元年度（2019）の本学科の開講科目である「子ども学演習」の授業において、本学科の3年生が主体となり開催している。学生は、活動内容の企画・立案、当日の運営までを行っている。活動の企画・立案・準備は、開催日によって取り組む時期は異なるが、当日の活動で使用する小物や壁面、プレゼント等の制作・準備に取り組む。開催日の約1週間前に当日を想定したりハーサルを実施し、担当教員からの指導や助言を得ながら開催当日に向けて準備・練習を重ねる。開催前日と活動終了後は、衛生管理のため各使用教室の清掃や消毒、遊具等の安全点検を行っている。

2) 開催の概要

本活動の参加対象者は、乳児から小学生までとその保護者を対象としており、開催曜日・時間は、「①木曜開催／11：00～12：00」と「②土曜開催／10：

30～11：30」を設定している（今年度においては、他講義等の都合により一部変更して開催している）。大まかな活動スケジュールは、Table. 1の通りである。

Table. 1 活動スケジュール

【リハーサル】（※主に開催1週間前の講義内にて実施）

学生の動き	
10:30～11:00	打合せ（役割決め・清掃方法・スケジュール等）
11:00～12:00	リハーサル

【開催前日】

木曜日開催の場合	土曜日開催の場合	学生の動き
水曜日 16:20～	金曜日 17:50～	使用教室の掃除 会場案内等の掲示 活動の準備（壁面・使用道具等の搬入）

【開催当日】

木曜日開催	土曜日開催	活動スケジュール	学生の動き
10:30～	9:30～	受付開始	環境設定 受付・駐車場・会場の誘導
11:00～12:00	10:30～11:30	子どもミュージアム開催 アンケート記入	活動プログラムの実施
12:00～13:00	11:30～12:30		後片づけ・掃除

3) 開催場所

本学の佐賀キャンパス3号館1階にある「表現スタジオ (Figure. 1)」、 「子育て支援室 (Figure. 2)」、 「保育演習室 (Figure. 3)」の3室を主な活動場所とし開催している。表現スタジオは、室内の1壁面が鏡になっており、ピアノが常時設置されている。また、子育て支援室には、活動前に自由に使用できるボールプールや滑り台等の遊具が設置され、保育演習室には、絵本、ベビーベッド（2台）、授乳が可能なスペースが設けられている。また、子育て支援室と保育演習室の間には、幼児用トイレ、幼児用洗面台、おむつ交換台が設置されている。



Figure. 1 表現スタジオ



Figure. 2 子育て支援室



Figure. 3 保育演習室

上記の3室だけでなく、活動内容に応じて体育館や理化学実験室、美術工芸室を使用し活動を実施した (Figure. 4-1, 4-3, 4-4)。また、学内における開催以外の“学外企画”として体験学習施設「佐野常民記念館」^{注1)}においても開催した (Figure. 4-2)。



Figure. 4-1 第6回開催：体育館
『体を遊ぼう』



Figure. 4-2 第9回開催：佐野常民記念館
『郷土 佐賀を知ろう』



Figure. 4-3 第10回開催：理化学実験室
『身近な「水」を調べてみよう』



Figure. 4-4 第12回開催：美術工芸室
『絵具で遊ぼう』

4) 参加募集方法

活動参加の募集方法は、年度初めに年間の開催スケジュールを学内のホームページに掲載し参加を募った。また、開催スケジュールを記載したチラシを、本学近郊の小学校や公民館、附属の幼稚園・保育園に配布したり、大学内のラック数か所にもチラシを設置した。さらに、昨年度までの子どもミュージアム参加者にも郵送し参加の募集を行った。

3. 活動実績（令和元年度）

1) 参加者実績

令和元年度は、通算32世帯の参加があり、うち27世帯が新規参加であった（Table. 2）。5世帯は、昨年度までに参加歴のある方々であった。

Table. 2 参加申込の状況

参加世帯数 (内訳)	平成30年度		令和元年度	
	継続	新規	継続	新規
	10	17	5	27
	[37%]	[63%]	[16%]	[84%]

実数は世帯数を標記

2) プログラム内容と参加実績

令和元年度は、年間13回の開催（平日開催4回・土曜開催9回／うち1回は学外企画）を行い、延べ97世帯（241名：大人103名、子ども138名）の参加があった（Table. 3）。各回の参加実績は、Figure. 5の通りである。

Table. 3 子どもミュージアムのプログラム内容と参加実績（令和元年度）

開催日	曜日	内容	担当	参加世帯数	参加人数	大人	子ども	
第1回	5月26日	土 『音楽で遊ぼう』	櫻井琴	24世帯	49名	24名	25名	
第2回	6月7日	木 『新聞紙で家をつくろう』	赤星	8世帯	26名	9名	17名	
第3回	6月23日	土 『言葉の世界を広げよう』	岩根	4世帯	12名	5名	7名	
第4回	8月25日	土 『親子でチャレンジ! 脳トレぬり絵』	渡邊	1世帯	2名	1名	1名	
第5回	9月12日	水 『世界の遊びであそぼう』	松井	7世帯	21名	8名	13名	
第6回	12月8日	土 『体を遊ぼう』	松本	9世帯	28名	11名	17名	
第7回	10月18日	木 『佐賀の植物を知ろう』	田中	7世帯	20名	9名	11名	
第8回	10月20日	土 『みんなで楽しく遊ぼう』	櫻井奈	12世帯	25名	12名	13名	
第9回	11月1日	木 『樂土 佐賀を知ろう』	山田	2世帯	4名	2名	2名	
第10回	11月3日	土 『身近な「水」を調べてみよう』	飯塚	2世帯	4名	1名	3名	
第11回	12月1日	土 『絵本小劇場』	高尾	13世帯	27名	13名	14名	
第12回	12月8日	土 『絵具で遊ぼう』	高石	7世帯	19名	7名	12名	
第13回	1月17日	木 『かすやかたちであそぼう』	草場	1世帯	4名	1名	3名	
				合計	97世帯	241名	103名	138名

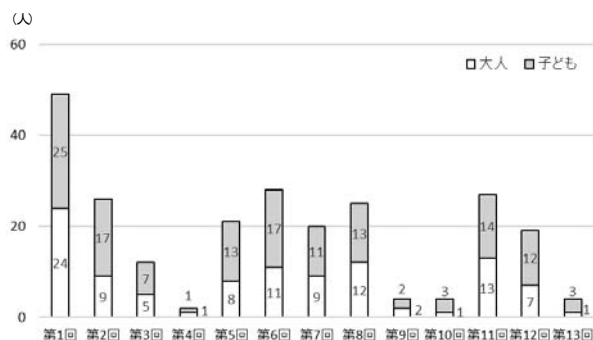


Figure. 5 各回別の参加実績

4. 参加者のアンケート方法及び結果

本活動では、活動をよりよいものにしていくために活動終了時に参加者（保護者と小学生以上の子ども）を対象としたアンケート調査を行っている。アンケート内容は、参加者の基本情報（性別、年齢、勤務形態）、参加歴、参加のきっかけ（新規参加者のみ）、参加の動機、活動の満足度、今後の活動への参加希望について質問した。また、参加しての所感や感想、今後の活動への要望等について質問した（Table. 4, 5）。

Table. 4 保護者対象アンケートの質問項目

項目	内容
項目1:	性別
項目2:	年齢
項目3:	勤務状況
項目4:	参加歴
項目5:	活動を知ったきっかけ[※新規参加者のみ]
項目6:	活動参加の動機
項目7:	活動内容への満足度
項目8:	子どもにとってどのような体験になったと思うか [自由記述]
項目9:	保護者自身にとってどのような体験になったか [自由記述]
項目10:	今後の参加希望
項目11:	活動への要望 [自由記述]

Table. 5 子ども対象アンケートの質問項目

項目	内容
項目1:	性別
項目2:	小学校名
項目3:	学年
項目4:	参加歴
項目5:	活動参加の動機
項目6:	活動内容への満足度および感想・要望[自由記述]
項目7:	今後の参加希望

1) 保護者のアンケート結果

①保護者の基本情報（年齢・勤務形態）

参加した保護者の年齢層は、「30歳～34歳(34%)」

が最も多く、次いで「35歳～39歳（31%）」であり、30歳代が3分の2を占める結果であった（Figure. 6）。参加者の中には、夫婦揃って親子で参加する家族や父親と参加する家族、友人の誘いによって参加する家族も多く見受けられた。参加後のアンケートには、「卒園依頼のお友達にも会えて、先生にも会えて一緒に楽しい時間を過ごせてよかったです」等の意見もあり、親子だけでなく、様々な出会いや交流の場となっていることが推測できる。

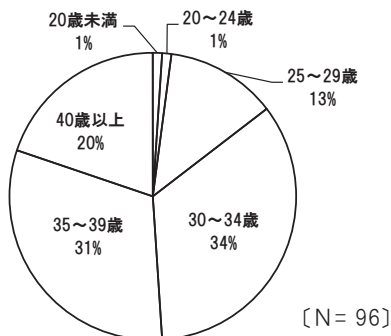


Figure. 6 保護者の年齢層

勤務形態については、「働いていない」が45%であり、次いで「常勤〔育休含〕（39%）」、「パート（14%）」、「その他（1%）」、「無回答（1%）」という結果であった（Figure. 7）。

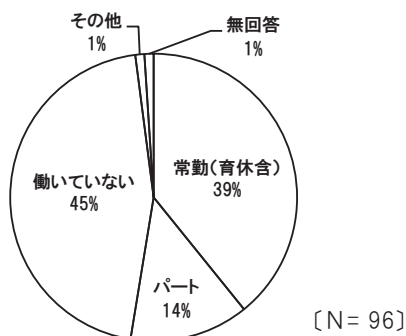


Figure. 7 保護者の勤務形態

②参加歴

活動への参加歴については、「4回以上」が39%と最も多く、次いで「はじめて（33%）」、「2回目（15%）」、「3回目（10%）」、「無回答（3%）」という参加状況であった（Figure. 8）。

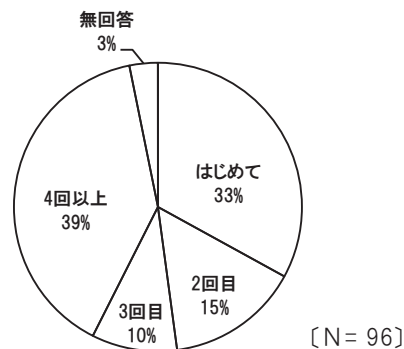


Figure. 8 参加歴

③活動参加の動機

参加動機については、「子どもが喜びそう」が最も多く、103名中68名（66%）の回答があった。次いで「内容に興味があった」が44名（43%）」、「友人の誘い」が26名（25%）」という結果であった。

参加動機の順位を昨年度と比較すると、「子どもが喜びそう」に次いで「内容に興味があった」は昨年度と同様の内容であった。しかし、昨年度3番目に多かった「親自身のリフレッシュ」に代わり、今年度は「友人の誘い」という結果であった（Figure. 9）。

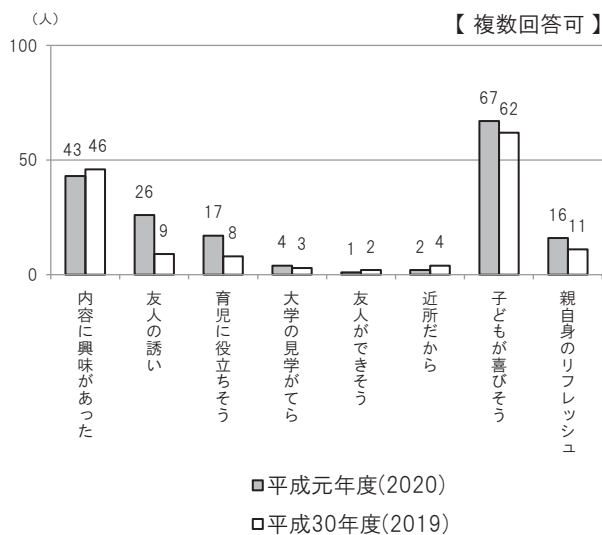


Figure. 9 保護者の参加動機

6割以上の保護者は、活動への参加動機を「子どもが喜びそう」と回答している。その背景には、自宅での遊びには限界や制限があるが、活動において自宅にはない様々な玩具で遊ぶことができたり、自宅では遊べないものに触れさせたり、体験させることができ、子どもの遊びや遊び方を充実させるきっかけになっていることが推測できる。保護者のアン

ケートにも「子どもの楽しむ様子が見れた」や「子どもの笑顔が見れて幸せ!!」,「たくさんの同年代に囲まれてよかった」,「色々な年の子とかかわれた」,等の回答が得られた。現代社会では兄弟や姉妹がいない子どもも増えてきているが,本活動には近い年齢層の子どもが集まることから,同じような年齢の子どもとの交流や集団での遊びや活動を通して,社会性や協調性を育んだり,一人ではできない対抗戦型等の集団的な遊びを体験したりすることができることも本活動の醍醐味であると考ええる。

2番目に回答が多かった「内容に興味があった」は,自宅とは違う環境において,子どもがどんなことに興味を示すのかや自宅ではみられない子どもの姿や成長を知る良い機会になっているのではないかと。アンケート結果からも「子ども同士で協力することの大切さを学ばせることができました」,「子どもが頑張っていたり,喜んだり,悔しがっている姿が見れた」,「子どもが音楽が好きだということが改めて分かった」,「子どもができていくレベルを知り驚いた」,「子どもの発想力を高める体験になりました」,「子どもの理解力が分かりました」,「家ではあまり見ることのない様子,初めて会う方たちとの接し方など我が子の社会性を知ることができる良い機会となりました」,「自宅ではなかなかできない体験を子どもにさせて,伸び伸びと成長して欲しいという気持ちをこういった企画に参加させていただきながら親子共々成長したいと思う」等の回答があった。本活動が家とは違った環境の中で,活動における遊びや体験を通して,視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚である五感を使って新たな発見をしたり,知識を体得したり,興味・関心を広げてほしいという親としての願いや思い,これまで気づかなかった子どもの成長や新たな一面を知る良い機会になっていると考える。我が子への期待や我が子の成長を感じる良いきっかけになっていることがうかがえる。

昨年度は3番目に回答が多かった「親自身のリフレッシュ」に代わり,今年度は「友人の誘い」が多かった。保護者のアンケート結果には,「ほかのお母さんたちとのつながりができてよかった」や「お母さんたちのアドバイスや子育てを共有するきっかけとなりました」,「同年代の子どもと保護者と交流できた」との回答があった。浅井(2019)は,『子育て不安を感じる母親にとっては,子育て支援の専門家だけでなく,時にはそれ以上に,ママ友のような子育て仲間の存在は重要である。子育て不安を抱

える母親にとっては,ママ友は「自分と同じ立場の人」,「自分の気持ちがわかる人」という同質性を有している』³⁾と述べている。現代社会では家庭間や地域との関わりが薄れてきている今日,子育てに不安を感じる親(保護者)も多く,子どもへの子育て支援だけでなく,本活動がママ友との交流やママ友との出会いを通して,子育てに対する不安や悩みを共有したりする貴重な機会となっているのではないだろうか。

④活動内容の満足度

本活動に参加しての満足度(「非常に満足した」,「満足した」,「やや物足りない」,「物足りない」)を尋ねたところ,「非常に満足した」が50%,「満足した」が44%と回答している。一方で,6%は「やや物足りない」と回答している(Figure. 10)。

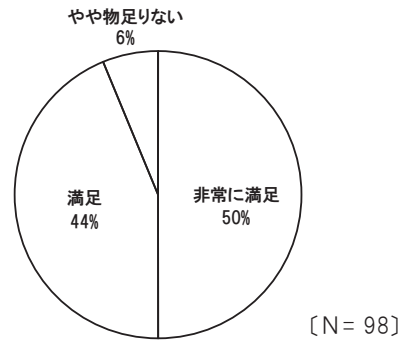


Figure. 10 満足度

アンケート結果より,本活動に参加した保護者の9割以上が満足感を抱いていることが明らかとなった。

活動に参加しての所感(保護者にとってどのような体験となったか)について自由記述で尋ねたところ,「親子の触れ合いになった」や「子どもとの楽しい時間」,「子ども,保護者,学生の交流の場として良い機会だった」等の回答が数多くあり,普段子どもと向き合う時間が少ない親にとって,本活動が“親”-“子”をつなぐ充実した楽しい時間になっていることがうかがえる。また,「家にいるときとは違う新鮮さだった」や「リフレッシュになった」,「休日の時間を有意義にできた」,「久しぶりにお会いした人がいてお話しできて良かったです」との回答もあり,保護者自身にとっても,自宅以外の場所や環境で過ごすことで新たな刺激や気分転換になり,満足度の要因になっていることが推測される。

⑤今後の活動への参加希望

今後の活動への参加希望(「是非参加したい」、「機会があれば参加したい」、「参加したくない」)について尋ねたところ、「是非参加したい」が73%と最も多く、「機会があれば参加したい」が25%という結果であった (Figure. 11)。

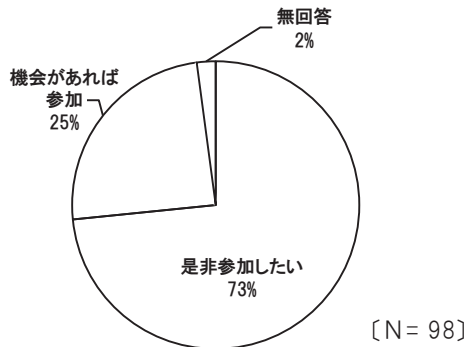


Figure. 11 今後の活動への参加希望

⑥自由記述から (一部抜粋)

質問紙の7項目目に本活動に参加して、保護者からみた子どもの様子の所感について、『子ども』にとってどのような体験に繋がったか、また『保護者』にとってどのような体験に繋がったかについて尋ねたところ、多くの感想が寄せられた。

『子ども』にとっての所感 (一部抜粋) は、「歌と音楽、普段は使えない楽器を体験できた」、「みんなと活動することで、順番を守ったり、友達を応援したり刺激になった」、「植物に目をとめて、これは何と興味を持つ機会になった」、「新たな場所に慣れること、友達の様子を知る機会になった」、「身体を動かすことの楽しさ」、「自由な発想で描く楽しさを感じられたと思う」等、多くの感想が寄せられた。親から見た子どもの姿は、自宅とは異なる環境において、自宅ではできない活動や体験を通して、普段見ることのできない子どもの様子や、親自身が子どもの成長、子どもの興味・関心に気づいたり、我が子に対する新たな発見をすることで、子育ての喜びを感じたり、親であることの喜びを実感することにつながり、今後の“親” - “子”の良好な関係性に大きく影響していることが推測できる。

『保護者』にとっての所感 (一部抜粋) は、「子どもと一緒に音楽を楽しむことができた」や「子どもと向き合う。一緒に楽しめることができて良い時間になりました」、「遊びの勉強になった」、「ポンポンや楽器など子育てに役立ちそう」、「家でもカルタ

や平仮名を使って遊びたいと思う」、「内容が充実していて満足しました」、「のびのびと遊ばせられてよかった」等、子どもと一緒に活動することの楽しさを改めて実感したり、活動を通して得た遊びを習得したり、保護者の子育ての自信につながっているのではないかな。

⑦企画してほしい講座・要望

今後企画してほしい講座内容は、人形劇やリトミック、絵の具やお絵かき教室、折り紙・木工・切り紙、外に出てピクニック、イレットトレーニング、0歳児向けの講座、親子で体を動かして楽しめる講座、子ども達同士が関われそうな講座の要望があった。また、「保護者対象の読書会など普段できないことが出来ると嬉しい」や「親が少しでもリフレッシュできるような企画。ヨガ・マッサージ・読書など普段できそうにないことが出来ると嬉しい」等の要望もあり、子どもへの子育て支援だけでなく、親自身のリフレッシュとなるような“寛げる場”や“癒しの場”といった気分転換になるような環境や場所を求めていることが推測できる (Table. 6)。

Table. 6 企画してほしい講座・要望

<p>【企画してほしい講座】 (一部抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リトミック ・人形劇 ・外に出てピクニック ・トイレットトレーニング ・切り紙・木工・折り紙 ・絵の具やお絵かき教室 ・身体・運動遊び ・0歳児向けの講座 ・親がリフレッシュできるような企画(ヨガ・マッサージ・読書安など)
<p>【要望】 (一部抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学生が参加できる講座(土・日の講座)を増やしてほしい ・小さい子ども向けの開催をもっとしてほしい ・身体を思いっきり動かした運動遊びや絵具・工作など政策ができる講座をたくさんしてほしい

2) 子ども対象 (小学生以上) のアンケート結果

平成元年度 (2019) は、138名の参加者 (保護者を除く) のうち33名が小学生以上の参加であった。子ども (小学生以上) を対象に実施したアンケート結果を以下に示す。

①活動参加の動機

活動参加の動機として、「おうちの人が申込していたから」が最も多く21名が回答していた。次いで、「おもしろそうだったから」が16名、「大学生に会

いたかったから」が6名、「友達の誘い」が1名という結果であった (Figure. 12)。この結果より、親（保護者）は自宅とは異なる環境において、普段できない活動や体験をしてほしい、参加者や大学生等の様々な人との交流をする機会を望んでいることが推測できる。次年度以降も活動内容を企画するにあたり、面白そうや楽しそうと思えるような参加者の興味関心がわくような活動内容を企画していく必要があると考える。

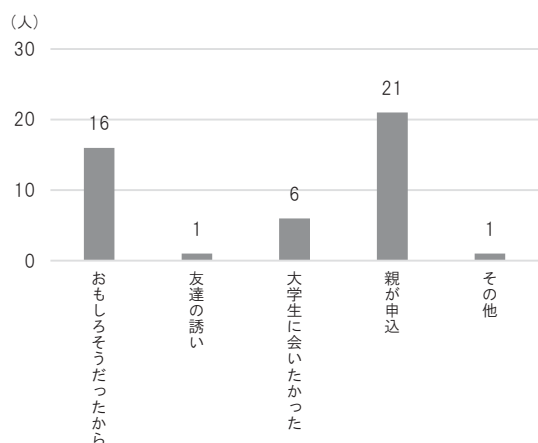


Figure. 12 子どもの参加動機

②活動内容の満足度

参加した子ども（小学生以上）33名のうち、27名が「とても楽しかった」と回答し、次いで「まあまあ楽しかった」が4名、「とてもつまらなかった」が1名という結果であった。感想（自由記述）として、「今日したことはすごく楽しかった。新聞紙でいろいろなことをして楽しかった。また来たい。」や「おにいさんやおねえさんとあそべてとてもたのしかったです。」「いろいろないろやどうぐをつかって、おもしろいえができたので、またかきたくなりました」等の感想があり、本活動に参加した子どもの多くが何らかの満足感を抱いていることが明らかとなった。一方で、「とてもつまらなかった」と回答した子どももいるため、今後の活動内容を企画する際に、子どもの興味・関心を引き出す内容や普段家庭内ではできないような遊び・遊具の提供、参加対象年齢にあった活動の提供ができるよう、今後更なる活動内容の検討が必要であると考えられる。

③今後の活動への参加希望

今後の活動への参加希望として、「また参加したいか」尋ねたところ、回答した31名全員が「参加し

たい」と回答している。自由記述には、多くの子ども達が“楽しかった”と記述しており、参加した子ども達にとって、本活動が充実した楽しい時間となっていることがうかがえる。

5. 学生アンケート

各回の活動実施後に、学生へアンケート用紙を配布し、本活動への取り組みにおける活動の振り返りとして、子育て支援活動を通して学んだことや感じたこと、今後の展望等を記載するアンケートを実施した。

1) 学生のアンケート結果

「子どもミュージアム」に参加して学んだことや感じたことを記述したアンケート結果より、活動を企画・準備・運営する立場にたち、活動する過程において、子どもと接しての気づきや保護者に対する気づき等多くの学びを得ていることが明らかとなった。学生にとっても“親-子”と関わる貴重な経験であり、年齢に応じた企画内容や・準備、環境構成の大切さ、事前準備の重要性、臨機応変な対応、親と子の関わり方、活動を企画した仲間に対する思い等、座学では学ぶこと・感じることでできない貴重な経験・学習の場となっているのではないかと。以下、学生の学び・感じたこと・展望を一部抜粋して記載する (Table. 7)。

Table. 7 活動実施後の所感

<p>【学んだこと・感じたこと】(一部抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 年齢(発達段階)に応じた企画・準備・配慮の大切さ ・ 計画や事前準備の重要性(安全面・環境構成) ・ 臨機応変な対応の大切さ ・ 運営スタッフ自身が活動を楽しむことの大切さ ・ 運営スタッフと協力し、成し遂げた時の達成感 ・ 座学では学べない実践的活動の魅力 ・ 自身の声掛けや行動一つで子どもの意欲等に影響すること ・ 社会に出た際に必要な経験
<p>【展望】(一部抜粋)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 今後の学習や実習に活かしていきたい ・ 今回のような機会があれば積極的に参加していこうと思った ・ 運営スタッフの良いところを真似して自分のものにしていきたい

6. おわりに

本稿では、子育て支援活動「子どもミュージアム」において、平成元年度（2019）の活動内容と実績、

保護者・子ども（小学生以上）・学生のアンケート結果について報告した。保護者へのアンケート結果より、本活動に参加した保護者の9割以上が満足感を抱いていることが明らかとなった。また、本活動が“子どもへの遊びの提供の場”や“親子の交流の場”だけでなく、“親同士の交流・仲間づくり・情報交換の場”、“親自身のリフレッシュの場”としても機能していることがうかがえる。岡本（2015）は、「地域社会の中で気軽に子育ての相談ができる拠点は、親同士の仲間づくりの場所として、また地域とつながる玄関口として、今後ますます必要となる。」⁴⁾と述べている。近年においては、核家族化や地域社会において人間関係の希薄化等、子育てに不安や戸惑いを感じながら子育てをしている親も多く、親自身にとっても、本活動が“親子-家庭-地域”といった様々な関係性をつなぐ、貴重な機会や有意義な時間となっていることが明らかとなった。今後は、子どもへの支援だけでなく子育てに負担感や戸惑いを感じ、つながりを求めている親への更なる支援が必要であることが推測できる。

近い将来、保育者や教育者としての立場にたつ学生にとって、活動を通して子どもの反応や親子が関わる姿、保護者の表情等から、“親-子”がとても有意義で充実した時間・機会を過ごしていることを感じることができているのではないか。山田・原田（2015）は、「机上の学びだけではなく、学内において親子とかかわり、実践的に保育を学ぶことは、今後の保育者としての意識向上につながると考える」⁵⁾と述べている。学生のアンケートからも「子どもだけでなく、保護者の方とも関わることができて、普段できないようなことができてよかった」や「自分が伴奏をしている時に男児がピアノに興味をもってくれたような振る舞いをしていたこと、子どもが楽器にふれて未知の世界にふれたように目が輝いていたこと、その子どもの様子を見ることができた保護者さんが写真を撮ったり笑ったり、とても嬉しそうだった」等の感想があり、子育て支援の重要性・必要性を感じることができるといい学びの機会となっていることがうかがえる。今後の保育者養成校において、実践的な活動を通して“親-子”をつなぐ子育て支援力や実践力・展開力をいかに育むことができるかが課題である。本活動が子どもの遊び場だけでなく、親自身のリフレッシュ・憩いの場、子育てに関する情報交換や共有ができる親同士の交流の場として機能することができるよう、参加者が求

めるニーズや要望に耳を傾け、求められる子育て支援について考察・再検討し、学生にとっても“子育て支援”の必要性を感じることができるよう今後も取り組んでいきたいと考える。

注

- 1) 佐野記念公園は、佐野常民の偉業を顕彰し、「博愛精神」を学んでいく佐野常民記念館（体験学習施設）と、日本近代科学技術の源流といわれる「佐賀藩三重津海軍所跡地」の遺構を顕在化した歴史公園からなる〔詳細は、佐野常民記念館ホームページ参照〕
<http://www.saganet.ne.jp/tunetami/>

引用・参考文献

- 1) 大城あゆみ，西村麻希，田中麻里：『西九州大学子ども学部における子育て支援活動－「子どもミュージアム」平成25年度の活動報告－』，西九州大学子ども学部紀要，第6号，p.111（2015）
- 2) 西村侑香里，松本麻希，田中麻里：『地域子育て支援活動「子どもミュージアム」における取り組み－平成29年度の実践報告－』，西九州大学子ども学部紀要，第10号，p.103（2019）
- 3) 浅井拓也：『地域子育て支援拠点での子育てに関する研究－拠点利用前後における母親の子育て不安の変化に着目して－』，秋草学園短期大学紀要，36号，p.24（2019）
- 4) 岡本聡子：『母親の育児不安解消における地域子育て支援拠点事業の効果－利用者アンケートを通じた測定と検証－』，大阪市立大学大学院創造都市研究e10（1），p.1-12，（2015）
- 5) 山田みつ子，原子はるみ：『保育者養成校平成の子育て支援施設における学生の学び－つどいの広場の学生支援を通して－』，全国保育士養成協議会第54回大会研究発表論文集，p.117（2015）
- 6) 土田耕司，鎌田雅史，小谷彰吾，荊木まき子，ズビャーギナ章子，松本希，柴川敏之，池田明子，秋山真理子，澤津まり子：『保育学生による地域子育て支援の取り組み－2019年度活動報告－』，就実論叢，第49号，p.99-110，（2020）
- 7) 大西薫，高松みゆき：『保育者養成校における

子育て支援の在り方－地域子育て支援センター
くれまちす子育て支援講座参加者の特徴とニーズ
の検討－』, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学
研究センター紀要, 19号, p.127-133, (2020)

- 8) 富田道子, 田丸尚美, 深澤悦子, 國清あやか,
須崎朝子, 瀧口美絵, 加藤弘美, 本岡美保子:
『広島都市学園大学の地域子育て支援拠点事業
に関する一考察:「いーぐる」利用者への第7
回質問紙調査から』, 広島都市学園大学 子ど
も教育学部紀要, 2号, p. 3-12, (2020)